

堀之内 2 式型式基礎論考 (I)

— 関東東部地域における成立期の諸相 —

阿 部 芳 郎

I. はじめに

関東地方後期前葉型式における型式学的研究は地域的、時間的細別作業の推進によって個別型式のもつ独自の位相やそれらの関係が次第に明らかにされつつあるが、そのなかにあつて堀之内 2 式土器にも同様な研究の推進が計られ、時間的細別を主とした成果のいくつかを数えあげることができる(今橋 1979、1980、石井 1982、小川 1984)。

当該型式の年代的な細別は、土器個体の分類のなかで地域的な位相についても幾分の視野を明らかにしつつあるが(註 1)、それらの指標のおおくが 2 式精製深鉢の文様系列に於いて指摘されるのみで型式全体の構成や型式構成要素の組織、構成についての理解が深化しているとはいえないのである。そうした土器型式の分析視点に立つことによって、堀之内 2 式土器の理解にさいして山積した問題の所在を認めるのである。

本論はかような研究現状にある堀之内 2 式における型式学的分析の推進を目的としたものである。そしてその初段階の作業として 2 式成立段階を視点とした土器群の型式学的検討に論議を収束させる。本稿ではそのなかでもとくに当該型式の研究上、その成立の様相にいくつかの問題が提起されてきた関東東部地域に限定した検討をおこなう。

堀之内 2 式についての認識は「……略……漸次加曽利 B 式に近似する傾向をもって居る。しかしながら堀之内式は加曽利 E 式及び B 式間の中間型式ではなく、独立した部分をもっている。また堀之内新旧両式も亦夫々別個の特有な土器とすべきである。」(山内 1939)という記述に集約されているように 2 式は一定の構造をもつ土器型式であるとともに、堀之内 1 式から加曽利 B 式へ連続する土器文化のなかに独自の位相をもつのである。

本稿では個々の土器個体の生成過程や群構成においてこれらの型式内容をより具体的に明らかにし、2 式の型式構造および地域間の関係の検討に分析をおよぼすための初段階の作業を整理しておく。

II. 関東東部地域における堀之内 2 式土器群の様相

1. 型式認識における問題の所在

関東地方のほぼ全域にわたり 2 式が分布をひろげ、一定の特質をもつ土器型式圏を形成

するという認識は型式設定の当初より指摘されていた項目であったが、近年本地域における当該型式の分布状態と土器個体の分析を拠り所として2式の存在の様相に具体的な論点をもつ研究（庄司1982）も発表され、本地域における2式の実相にいくつかの問題が指摘されるにいたった。

庄司氏による堀之内2式の検討は「ところが堀之内1式と加曾利B1式の間位置する堀之内2式期の生活面や文化層についての報告は、ほとんど皆無といってもよいほど少ない。しかも土器の形態はいわゆる精製深鉢形と注口形、内面に沈線をほどこした浅鉢形といった、ごく限られたものしか把握されていないのである。」（庄司1981 P34. 5～10）といった記述に問題の端緒が明確に指摘されている。

この問題の認識のなかには

- (1) 2式を構成する器種の偏りを指摘して具体的には縄文施文の粗製土器の様相についてふれ、「堀之内1式と堀之内2式の粗製深鉢が時間の経過にもかかわらず式的にまったく変化していないこと。」（前掲P38. 1～3）などを指摘するとともに
- (2) 土器の分析をふまえ関東東部地域における当該期の生活遺構の少なさを強調している。

(2)の指摘については堀之内2式の成立の状況を型式学的に明らかにする作業とともに、それらの出土状況を吟味することが先決であろうと思うが、(1)の指摘は2式の型式構造を認識する際の重要な問題を内包するものと考ええる。すなわち、2式の標本資料に代表される磨消縄文を多用する精製土器のみを当該期の土器群として考える視点によって、東部地域の様相を観察することだけでは「関東地方縄紋式土器後期」（山内1939）の型式群のなかに位置づけられる堀之内2式の型式構造の理解に及ばない事を暗示するものと推察するのである。

具体的には、東部地域において堀之内1式からの型式学的な推移の状況を検討することによって、1式のもっとも新しい段階の土器群とのあいだに型式学的な結節点を明らかにする事および関東西南部地域との比較検討をとおして2式の型式構造を理解し得るものと考えるのである。

2. 東部地域における型式学的連続性

堀之内2式の成立段階の様相の把握には先行型式との連続の状況を詳らかにして、土器個体を構成する要素の特徴とその組織構成等に理解をめぐらしておく必要がある。

関東地方における堀之内1式の成立過程とその時間的、系統的細別およびその理解については以前にその概要について触れたことがあり、この分析のなかでは堀之内1式を1a

式から1d式にわたる4つの細別型式の連続として理解し、東北地方中部および南部地域の型式群との年代的な対応関係を示し、異地域併行型式間の影響関係についての考えをまとめておいた(阿部1987)。また関東地方東部地域において、1a式から1d式の型式変遷を詳らかにするとともに、1式の型式構造理解のために最重要とおもわれる1c式における型式構成要素の組織構成についての認識事項の一部を示した(阿部1988)。

これらの成果をもとにして堀之内1式の後半の細別諸型式から2式の成立にいたるまでの型式学的連続性を検討することができるはずである。

(1) 堀之内1式終末段階の様相

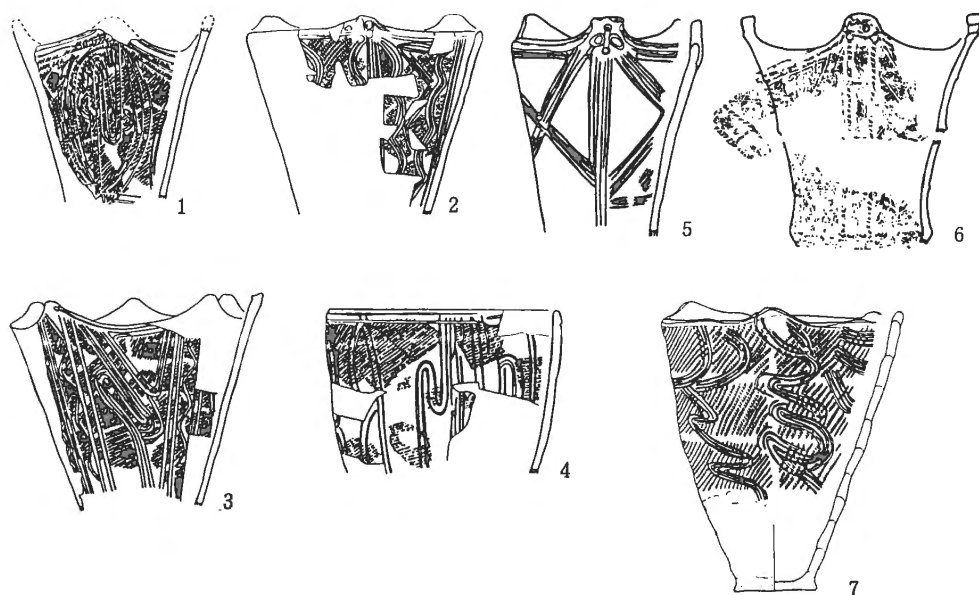
堀之内1式の変遷の後半段階の実情は細別において示した1c・1d式の特徴としてすでに何度か指摘してきたが、具体的には精製深鉢形における2形態の生成すなわち、1a-Ⅱ帯構成(A類)と1a-Ⅰ-Ⅱ帯構成(B類)という文様帯構成によって区分される精製深鉢と他の形態の精製土器と粗製土器群をもふくめ、共通にみとめられる口唇部文様帯(Ⅰa帯)の配置といった諸点に型式学的特性を示し、とくに後者の口唇部文様帯(Ⅰa帯)の生成過程に関東西南部地域の下北原式との影響関係を予測し、1c式の成立背景を透察したのである。

一方、1d式は千葉県伊籬白幡遺跡(宮城1986)20号A、B号住居とB住居を切って構築された5号土坑出土の土器の比較検討によって、1c式の伝統を継承しつつも胴部文様帯(Ⅱ帯)における文様展開の変質とこれと係わるモチーフの変化によって、後出的な特徴と型式学的な結節点を指摘した(阿部1988)。

先述したように本論で検討を加える堀之内2式においては庄司(1981)の指摘に理解の展望を得たように2式の土器組成の明確化が当地域における2式の実態の理解に深く結びつくものと思われるから、2式成立以前においても同様の視点における認識が必要とされよう。

先に少し触れておいた1c・1d式の細別における精製深鉢の変遷をまとめておくことにする。

1d式の検討をめぐって拙稿において分析の対象とした資料は、1c式の新相の土器群を出土する伊籬白幡遺跡20号A、B住居に後出して構築されたと考えられる5号土坑出土の3点の個体資料であった(第1図)。これらのなかでは5、6の個体資料が1a-Ⅱ帯の文様帯構成をもつ深鉢A類としたものに該当し、20号A住居出土の1c式新段階の深鉢A類1、2、3、4の構成要素の継承されたものと考えることができる。胴部文様帯(Ⅱ帯)の文様は波状部下に描かれる各種の垂下文様が直線化しⅡ文様帯を縦に分割する区画文に変容することと、これら縦位区画文のあいだに幾何学的なモチーフが生成される経過



1～4(20号住居)

5～7(5号土坑)

第1図 千葉県伊篠白幡遺跡20号A、B住居および5号土坑出土土器が観てとれる。

一方、口唇部文様帯(Ⅰa帯)は3～4山の波状縁に円形刺突などを飾る突起が継承される。Ⅰa帯は通常この波状部の突起を集約部分として各間を1乃至2本の沈線が周回するものが一般的である。またⅡ帯の幅が次第に狭小化する傾向が強まり併行してⅡ帯の下端を沈線や隆線で区切るものも存在する。この特徴は堀之内2式における胴部文様帯(Ⅱa帯)に連続する要素であることは再説をまたないが、Ⅱ文様帯の下端を区切らない一群も同時に存在する事実を認識することは2式の時間的、地域的位相を理解する点で重要であろう(註2)。

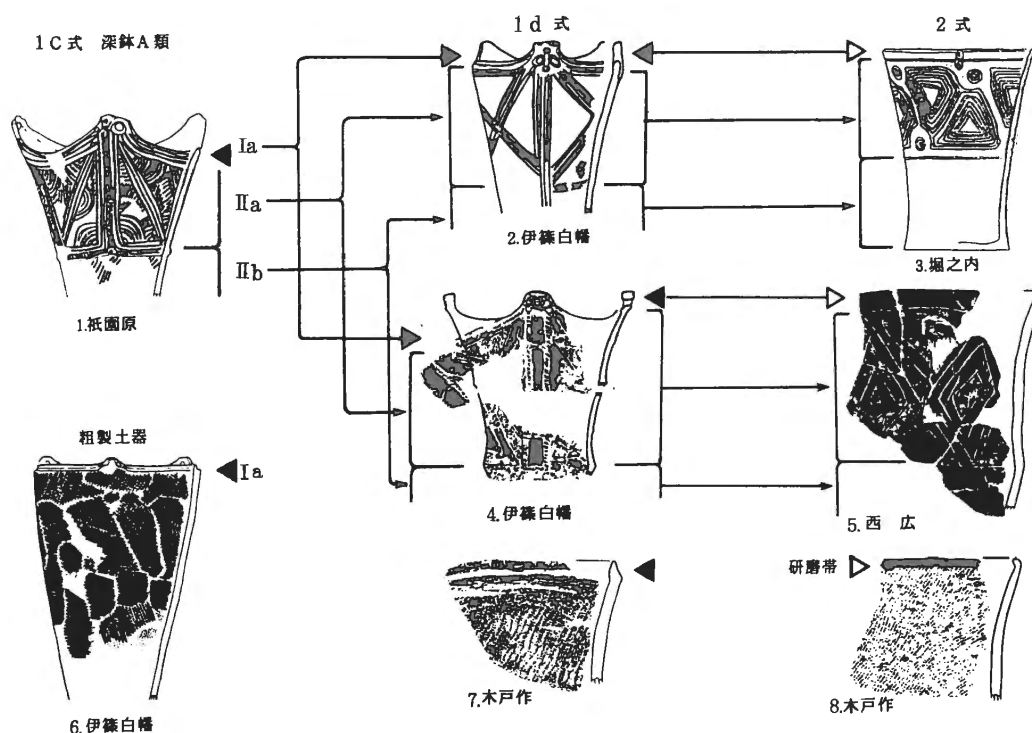
深鉢A類の系列上に1d式を構成する特徴の幾つかを指摘したが、5号土坑からはさらにこれらとは幾分異なった特徴を持つ深鉢が相伴している(第1図7)。この深鉢は3山の小波状口縁をもち波状部は三角形の小突起が付けられている。そして胴部文様は不規則ながらも小波状部分の下に半裁竹管工具による多条沈線により曲線的な蛇行文様が描かれている。そしてさらにこれを単位として各間に曲線的なモチーフが描かれており、地文に縄文が施文されている。意匠文様において粗製の要素をもつこの個体資料はいかなる生成の経緯をもつのであろうか。3山の突起の由来や、これに対応した胴部の文様の展開のくせや胴部下半が無文部として残される特徴および土器形態などは、1c式の深鉢A類に基本的な要素の構成をたどり得るであろう。一方、1c式の文様帯構成の特徴であった口

唇部文様帯（Ⅰa帯）は7の個体資料には存在が不明確である。堀之内1c式に生成されるこの文様帯の変遷の特徴についてはすでに触れてきたことであるが、（阿部 1988）1式終末の様相の理解におよぶために、Ⅰa帯の変遷を概観してみよう。

（2）堀之内1式におけるⅠa帯の変遷

堀之内1式におけるⅠa帯の生成は称名寺Ⅱ式の系統上に関東北西部に成立する下北原式の文様帯を口縁部文様帯（Ⅰ帯）に採り込むことによっており、その生成の状況には深鉢A、B類の別を基本としていくつかのパラエティがあり、とくに深鉢A類のⅠa帯は幅を狭めたⅠ帯とⅡ帯とを分帯する文様帯の分帯沈線がその性質を変化させて口唇部文様帯（Ⅰa帯）に転化している事実を指摘した（阿部1988）。これらは口唇部に太い一条の沈線を周回させ、これが口縁部の突起に連結するものが一般的である。1c式の古い段階ではこの沈線は深く引かれるものが一般的であるが、新段階から1d式の変遷のなかでは次第に幅を広げつつ浅いものに変化する。この部分を研磨するものも多く、特にこれら一連の変化として口唇部の断面形態が外削ぎ状に変化する点に注意する必要がある。

このことは東部地域の2式の精製深鉢の口縁部が「く」字に内折し、この部分に丁寧な研磨が施されるくせと関係するであろう。



第2図 Ⅰa文様帯の変遷模式

以上に図解した Ia 帯の変遷は、精製土器以外の縄文や櫛歯状沈線を多用する当該期の粗製土器のいくつかにも年代的な序列を予測しうる指標となろう。

先に検討を試みた伊篠白幡遺跡 5 号土坑の個体資料に 1 式終末における Ia 帯の変遷の様相を窺うことができよう。指摘してきた第 1 図 8 の個体の口唇部文様帯は以上のような文様帯の加飾技法の変遷の経緯のなかで次第に退化消失したものである。そしてまた胴部文様のモチーフの粗製化を 1 式終末段階における土器群構成の特質として指摘し得るであろう。

Ⅲ. 関東東部地域における堀之内 2 式の生成

東部地域における 1 式終末段階の様相についてその概要をまとめてきたので、これに後続して生成される 2 式初頭の状況を理解する手懸かりが得られたはずである。次に当地における 2 式の出土事例に観察の目をむけてみよう。

1. 個体群の検討―貝の花貝塚 28 号住居出土土器群の構成―

東部地域における堀之内 2 式の内容を知ることのできる一括出土例は現状においてもなお多いとはいえないが、千葉県貝ノ花貝塚（八幡 1973）の第 28 号住居出土の個体資料がその一例として掲げられよう（第 3 図）。

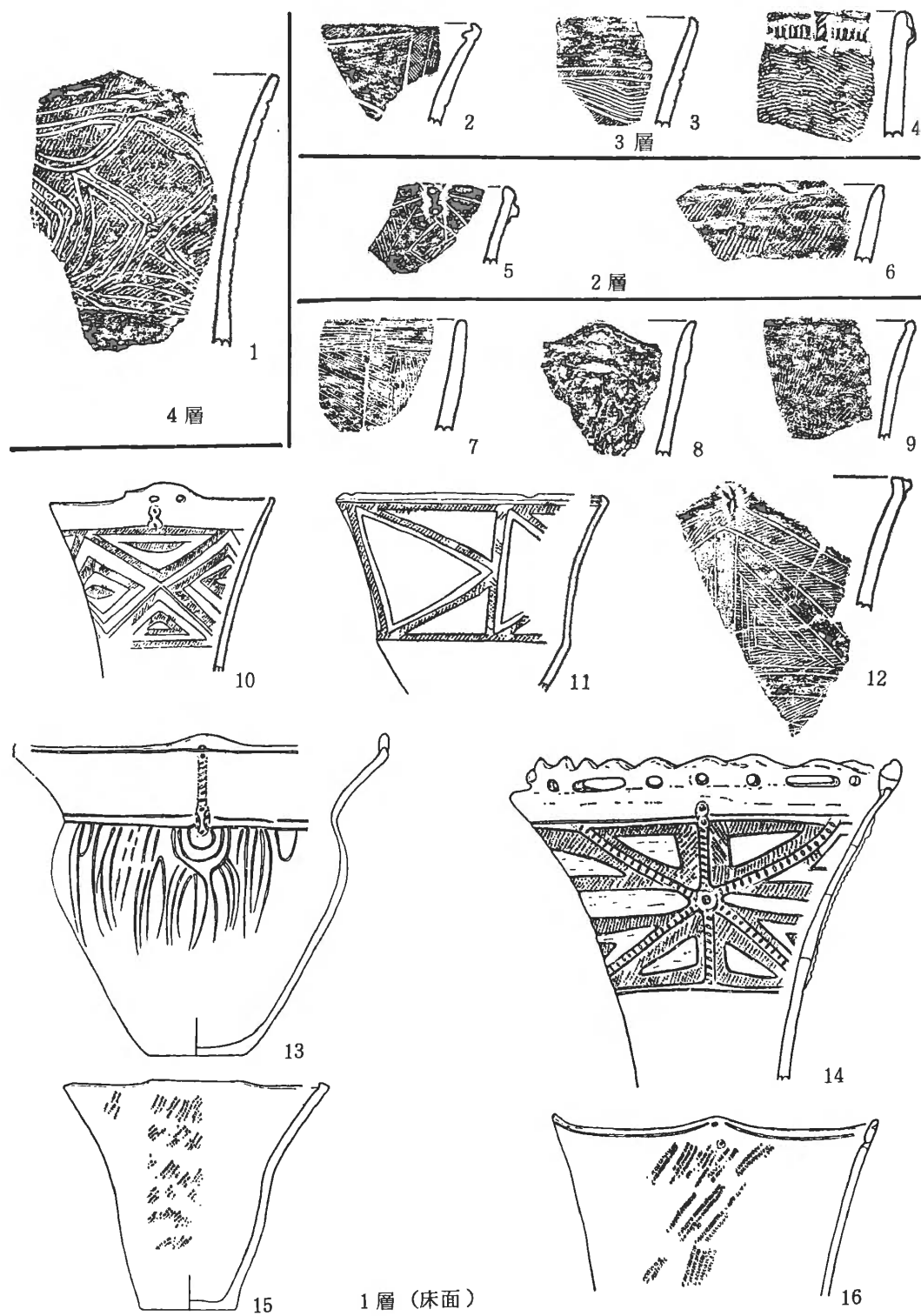
床面から出土したのは 6 個体の土器と若干の破片資料であり、さらにこの住居を覆う 3 枚の包含層から 2 式の破片資料が出土している。先に検討を試みた 1d 式についてと同様の視準によってこれらを観察してみよう。

床面出土の個体 1～4 は精製土器群であり、10、14 は 1d 式の深鉢 A 類の系列をそのままに継承した形態を保持している。11 は 2 式にあらたに生成される形態であるがその系譜は同様に深鉢 A 類にもとめられるであろう。伊篠白幡遺跡第 5 号土坑出土の A 類の一個体（第 1 図 6）の胴部文様帯の下端が屈曲をもって張りだす特徴は貝ノ花の個体の生成に無関係ではなからう。

13 は深鉢 B 類に対応するものである。伊篠白幡遺跡の一括資料中には B 類がふくまれておらず組成のうえでは満足ではない。貝ノ花では両系列が共存している状況を示しているのである。B 類の形態は器高が低くなり 1c、1d 式の形態とは幾分異なる。この特徴はむしろ西南部地域に顕著にみとめられるものである。東部地域ではむしろ 1 式の伝統を形態的特徴においてもそのままに継承したものが多くいようである（第 6 図）。

一方、1d 式の理解において確認しておいた口唇部文様帯（Ia 帯）のありかたは当地における 2 式の生成過程を伝える特徴の一つに数えられよう。

10、11、14 の磨消縄文でⅡ帯を飾る個体資料の口縁部分に着目してみると 1c、1d 式



第3図 千葉県貝ノ花貝塚28号住居出土土器

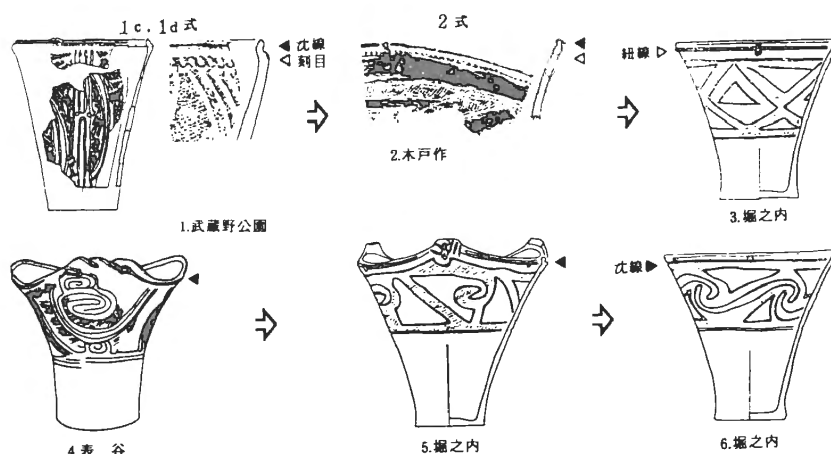
で特徴的に認められたⅠa文様帯が消失し無文部分に置き換わっていることに個体間の対応要素が指摘されよう。15の粗製土器についても同様であり口縁断面形態が外削ぎ状を呈するのは1d式に顕著になるⅠa帯の変化を受け継いだものであろう。13にはⅠa帯が沈線によって描かれており、幾分古い様相を保ち16の粗製土器についても同様のことがいえる。28号住居の堀之内2式においては10、11、14の個体において深鉢A類のⅠa文様帯が無文帯に変化しているという変化が指摘されよう。このことは住居の覆土より出土した2式精製深鉢がいずれも口縁部に無文帯をそなえ本来のⅠa帯の装飾が形骸化しているといった点からも、時間的な限定性をもった現象であったことに理解が及ぶのである。

一方、これらのほかにⅠa文様帯が刻みや押捺をほどこした紐線によって表現された一群も2式には存在する。このようなⅠa帯の有無が堀之内2式精製深鉢の時間的弁別の基準と成りうるか否かを知るために、両者がいかなる経過のなかで生成されたものかを確認しておく必要がある。

2. 堀之内2式におけるⅠa文様帯の変遷

2式の成立の様相を明確に理解するためにはその直前段階にあたる1d式におけるⅠa帯の特徴を理解の範囲にしておくことが必要であるが東部地域における変遷については先述した(P11~12)(第2図)。

この説明のなかではⅠa帯が突起などの集約部分を残し、口縁に周回する沈線が次第に研磨帯に変質していく過程を示しておいたが、このⅠa帯の変遷からは紐線によるⅠa文様帯の生成は理解できないのである。それではこれらはいかなる変遷を経て生成されているのであろうか。第4図にその概要を知る沈線から研磨帯への変遷と対応しつつおこなわれるⅠa帯の変遷を図解した。



第4図 2式におけるⅠa帯の変遷

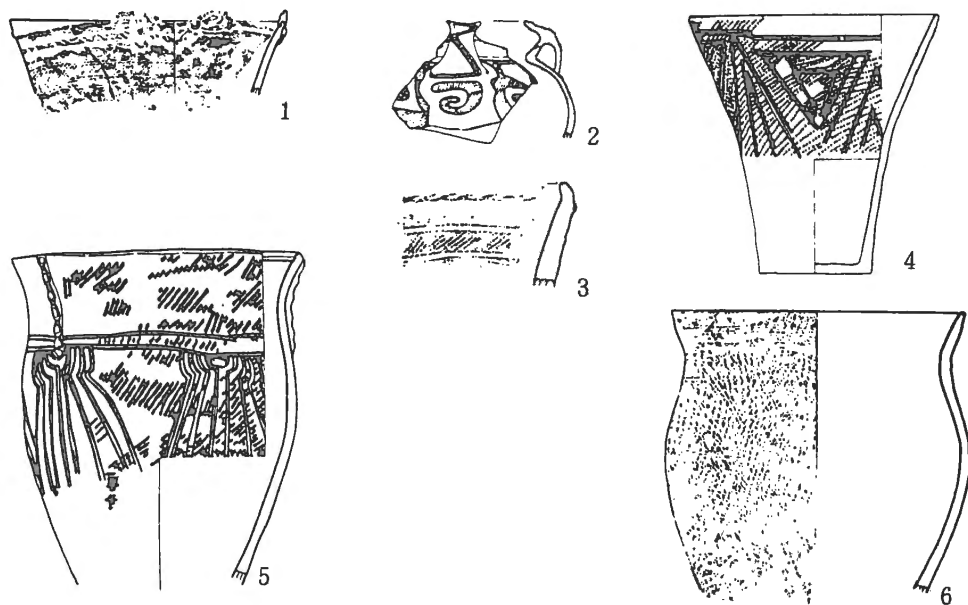
2式におけるⅠa帯の生成は研磨帯のみのものでも多くはこれに接して「8」字状の貼付文が付けられているのがふつうである。これらは粘土粒の上に縦に並ぶ2つの刺突によるものが一般的であり、口縁が波状のものや突起をもつものにはこれに対応する部位につけられるくせがあるから、これらは1式におけるⅠa帯の集約部分にみられる刺突に系譜するものであることに理解が及ぶ。

2式における紐線によるⅠa帯は同様に「8」字貼付文に接続するものが一般的であるから、その系譜は1式の沈線によるⅠa帯に関係すると考えるほうが妥当であろう。第4図5の堀之内貝塚の個体のⅠa帯はこの文様帯が1式からの継承であることをよく伝えるもので「8」字貼付文の間を連結するⅠa帯が一本の沈線によっているものである。これらはさらに同図2の木戸作貝塚の資料にみられるように口唇部に一本の沈線を引き、その下端に刻みを施すことによって2式の深鉢A類に一般的なⅠa帯が生成されるのであろう。この刻みの系譜については、おそらく単系ではなく1c、1d式のⅠa帯の沈線の下端におこなわれる刻みや1d式に多くみられるⅡ帯の分割隆線におこなわれる刻み(第1図6他)の両者が関係するものと考え。これらの一連の変化が貝ノ花の一括出土例には認められない点は重要である。

このⅠa文様帯の特徴は従来より2式精製土器の代表的要素とされ、2式自体の細別をめぐりこの紐線の有無や条数を細別の根拠の要素とする向き(関根1973、今橋1979)もみられるが、紐線文自体の有無はⅠa帯の表出技法におけるバラエティなのであり時間的な変化のみでは解決出来ない問題を含んでいるのである。つまり関東地方東部地域の2式の様相を伝える貝ノ花貝塚28号住居の一群には紐線の貼付によるⅠa帯が生成されないのである。したがってⅠa帯の有無やその条数によって2式を細別し、紐線のないものから有するものへといった一系的な変遷観においては紐線による加飾技法の発生を2式成立以後において新たに生成された現象として説明しなければならないであろう。紐線による加飾の技法は2式の地域的、系列的な問題を含んでいるのである。

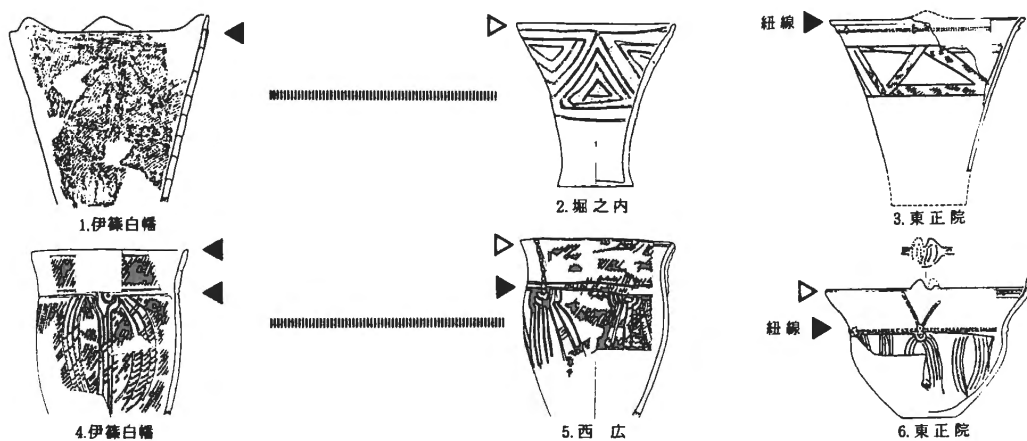
視点を変えて2式精製土器群を構成する主要な系列である深鉢B類についての観察を加えよう。先に図示した貝ノ花貝塚28号からは幾分古い様相を示すかとおもわれる深鉢B類が出土している(第3図13)。2式前半において、これに後出するものには千葉県西広貝塚1号住居の1個体が共伴関係の明確な一例である(第5図5)(註3)。

西広の口唇部に注目するとⅠa帯が消失していることがわかる。また胴部(Ⅱ帯)の文様も懸垂文が直線的になり器面の全体に多条化した沈線によって描かれている点が貝ノ花と異なる後出的要素となろう。同様に関東西南部地域でも東正院遺跡例(第6図6)のように器高を低く変化させながらもⅠa帯が消失しているが、他方注意されるのは胴上半の無文部(Ⅰ帯)と胴部下半(Ⅱ帯)を区分する技法が紐線によっており、また「8」字状



第5図 千葉県西広貝塚22号住居出土土器

貼付文が付けられる点で、この差異は深鉢A類におけるⅠa帯のパラエティに対応したものと考えられるのである。東部でも同様のくせをもつものは西広貝塚（米田1977）にもあるがⅠ帯とⅡ帯の分帯は西広と同様に沈線によっている。深鉢B類においてはⅡ帯上端を分帯する技法が、紐線によるものが優勢である点はA類においても基本的な系列の違いとして考えられるのである。そしてまた、2極をおきながらも両地域に深鉢A類の二者が共存するのはこの器種が1式以来の共通の対応関係（註4）を保持した結果によるものと考ええる。



第6図 2式精製深鉢におけるⅠa帯の対応関係

2式精製土器群の構成においては隆線文は西南部地域の深鉢A、B類に優勢であり、東部地域ではB類に低調でA類では西南部に対応する文様系列において主に採用されたものと思われる。またこれと対応した現象として西南部においても東部の文様系列が存在し、これらには東部同様に紐線による加飾が低調な傾向がある（註5）。

2式精製土器の関東内部におけるあり方を深鉢A、B類の文様帯構成から追求し、具体的にはIa帯の分析に東部と西南部の関係を推察した。

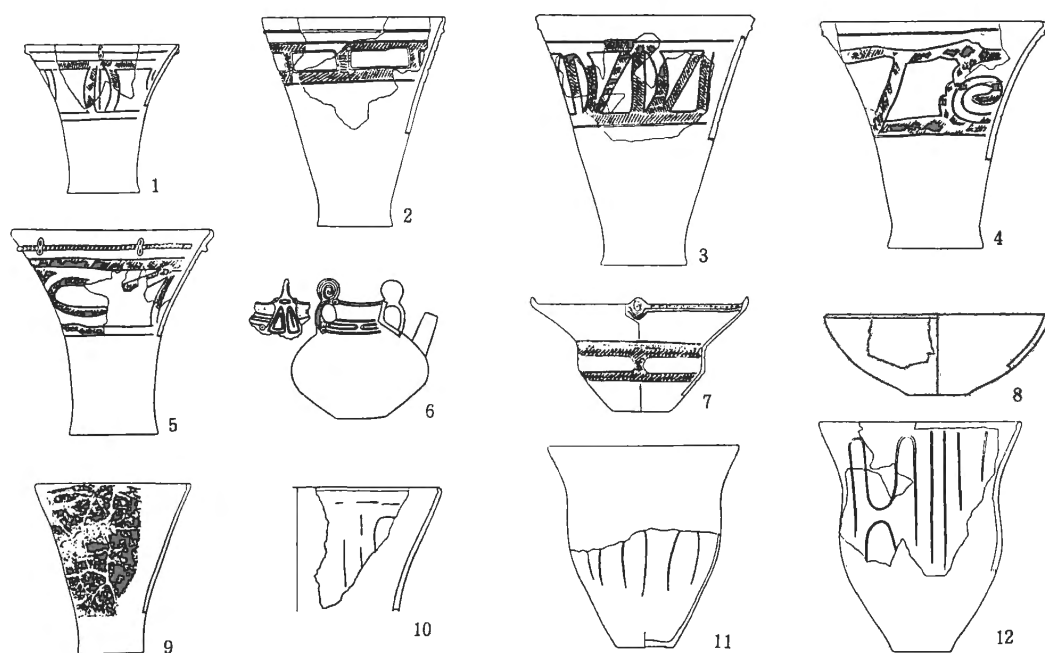
次に東部における精製深鉢の構成について少しふれておこう。

3. 東部地域における精製深鉢の構成

伊篠白幡遺跡5号土坑の1d式の精製深鉢のなかには貝ノ花に代表される磨消縄文の精製深鉢につながる系列と文様の粗製化が進行した深鉢（第1図7）が共存し、後者は基本的に深鉢A類に系譜することを指摘しておいた。この系列は西広貝塚2号住居にも存在し、形態や成形法及び焼成は他の精製土器と区別することは難しい。また口縁部に研磨帯を残すものもあり、これらのことから深鉢A類の系列上に生成されたものと考えられるだろう。そしてまた、これ等の多くの胴部文様は地文に縄文をほどこす特徴がある。西広貝塚例は地文縄文に多条沈線により文様が描かれ伊篠白幡の1d式に近いが、同様の文様表出技法をとりつつも2式特有の幾何学的なモチーフを描くものも相当数存在するのである。後者については、これらを当地における2式初頭に位置づける見解（石井1982、小川1984）が定着しつつあり、2式の成立が磨消縄文の精製土器のみの追跡によっては理解の及ばない現象であることが明らかにされてきている。

しかし、この傾向のみを過大に評価し、関東において2式の生成を考えることは難しいことも事実である。貝ノ花の土器群の構成は、地文縄文の2式初頭に位置づけられてきた系列の他に1d式精製深鉢A類の系列のうえに位置づけをもつ個体が共存するのである。具体的には第3図14の個体が該当する。I帯が無文化しているのは東部地域に顕著な特徴で口唇部にはこのほかに1式の突起が横にひろげられた装飾がある。II帯の上下は沈線によって区切られ、内部に幾何学的な文様が刻みをもつ隆線によって描かれている。II帯に隆線を多用するくせは1c式以降多くの例があり、とくに1d式には縦横の区画以外にも隆線によってモチーフを描くものもみられる。

東部地域における2式の構成は以上のように単系的な変化ではとらえきれない系列構成から成り立つのである。とくに注意されるのは1式以来の精製土器が文様構成のうえで粗製化に傾斜するものが存在する点であり、逆に当該期土器組成のなかでは縄文や櫛歯文などの粗製土器とともに高い組成率を構成する。同様な土器構成は西南部地域でも観察されるが、粗製化するのとは東部地域とは系列を異にする1式段階で下北原式と称された沈線文



第7図 東京都龍津寺東遺跡敷石住居出土土器

を主体とした系列の深鉢である（第7図10～12）（註7）。第7図に西南部地域の2式の土器組成をつたえる一括出土例を示しておく。土器群の構成という視点からでは、2式の生成は関東地方東部と西南部地域の間で1式以来の系列を継承しつつも、独自の生成過程をもつ粗製土器群と両地域間で基本的な対応関係を保つ深鉢A、B類の相互の影響関係に成り立つものと予測できよう。したがって土器組成の問題のみに収束せず、これらの磨消縄文土器以外の系列的な変化とその構成の認識が当地域における2式成立の理解の深化に連動するものとするのである。

Ⅳ. 小 結

従来より2式土器群の存在が不明確とされてきた関東東部地域においては、それらが磨消縄文系精製土器群を判別の対象としたものであって、地域内における土器群の組織構成の理解、とくに1式終末の様相の理解を前提とした2式の型式学的検討に配慮を欠いていたのである。

これらの課題に検討を試みる分析が近年の2式研究の態勢といえようが、未だ土器文様の図形的な分析に終止する傾向も否定できない。

本稿においては東部地域における2式生成の過程を理解する手始めとして1式終末の状況を整理し、（1）2式精製土器深鉢A、B類の特徴となるⅠa帯の変遷を概観し、紐線

による加飾技法が西南部に連続をもつ事および深鉢B類にも同様の関係が観られることを指摘し、そしてまたこれらの系列別の変化が両地域間で明瞭な分布上の区分を形成しない融和的なありかたを示すことを予測した。また、(2) 深鉢A類の変遷上に磨消縄文系土器の成立と併行してモチーフの粗製化した一群の生成される事を示し、これらが曲線的及び幾何学的モチーフを構成して、磨消縄文系の系列とともに東部における2式初頭の土器群の一部を構成することを指摘した。(3) そして地域間で土器組成の主体をしめる粗製土器が深鉢A類における両地域間の関係と対立したかたちでそれぞれの地域内に独自の系列を形成することを述べた。そういった意味では2式は粗製土器における地域的独自性と精製土器群間の融和的關係を双極とした構造により構成された土器群といえるだろう。この関係の系譜は1c式における精製深鉢A類、B類の要素の交換および受容に求められようが2式においてはさらに深鉢A類が地域間に融和的狀態を關係させる主導となり、一方粗製土器が全体の組成率を高める点で1式と区分されるべき構造的な結節点をもつものと考えるのである。

次回においては、(1) および (2) をふまえて精製土器を構成する要素の組織構成の分析を行い細別の作業を通じて当地域における2式生成の実情をあきらかにし、(3) の検討によって土器組成の観点から2式の構造の一端を照射することにする。

限られた紙数で東部における2式の生成を理解するにあたってその前提となる事項の確認をおこなってきた。当該期土器群の分析にあたりもっとも重要かつ必要な文様の分析に作業を先行させなかったのは、土器群の理解に文様の図形的かつ一元的理解のみを優先させることを控えるためであり、そのためにいささか変速的な記述に終止した。意を酌んで堀之内式土器研究の理解につながれば幸いとするところである。

1988. 3. 2

謝 辞

本稿は1982年に作成した東日本後期前葉土器群を対象とした論文における堀之内2式の分析成果の一部を骨子としたものである。執筆後これに関係した論考、資料については十分な検討を加えることができなかったが次稿以後の課題としたい。また論文作成以来、戸沢充則先生には終始適切な御指導を頂いているほか、加曽利貝塚博物館の庄司克氏には本稿発表の機会を与えて頂いたことをはじめとして堀之内式の理解について多くの御教授をいただいた。記して感謝の意を表したい。

(明治大学大学院博士課程)

脚 註

1. 石井 1984. P24~34 等、石井は西部において 1 式末期に朝顔形深鉢の採用によって下北原系の沈線文土器群が粗製土器として変化したことを指摘している。
2. 1 式と 2 式を区分する視点として胴部文様帯（Ⅱ帯）の下端を水平の区切る手法の成立をもって 2 式の成立を唱える考え（鈴木 1982）があるが、とくに東部を中心とする深鉢 A 類のなかには下端区画をおこなわないもの及び不明確な一群が存在する（第 6 図 4 など）。したがって、この視点のみによって 1 式と 2 式を区分することは出来ないであろう。おもに下端区画をおこなうものは磨消縄文を多用する一群に顕著である。
3. 同様の一括出土例は、千葉県印旛村鎌刈遺跡 1 号住居がある。また本住居跡出土の土器群の全体は印旛村教育委員会の御好意により実見させていただいた。
4. 1 式後半（1c、1d 式）において深鉢 A 類は文様表出技法やモチーフの一部などに地域差をのこしつつも関東地方全域に分布をひろげ、各地土器群のなかで安定した組成を確立させる。
5. 三角文や曲線的な文様が残存する系列においては紐線文のⅠa 帯が低調であり、西南部地域でも同様の傾向がある。例えば神奈川県川和 23 遺跡 J20 号住居床面の一群（石井 1982）など。報告者の石井は、これらを 2 式初頭として捉えているが、筆者は 1 式終末（1α 式）と考える立場にある。
6. たとえば堀之内貝塚の一個体（桜井 1982. P30-109 個体資料）など。
7. 石井 1984. P31~35.

引用文献。（参考文献および図版資料の出典文献は次回に回す）

- 安孫子昭二 1981 「縄文後期の土器、関東地方」『縄文土器大成』3. 後期、講談社
- 阿部 芳郎 1987 「縄文時代後期前葉型式群の構造と動態－堀之内 1 式と東北地方の型式群の関係について」『駿台史学』71 号
- 1988 「堀之内 1 式の構成と変遷」信濃、第 40 巻 4 号、信濃史学会
- 石井 寛 1984 「堀之内 2 式土器の研究」調査研究収録 5 冊、港北ニュータウン埋蔵文化財研究収録
- 今橋 浩一 1979 「中妻貝塚出土の堀之内 2 式土器について」『取手と先史文化』上
- 1980 「堀之内式土器について」『太田区史（資料編）考古Ⅱ』
- 小川 和博 1984 「堀之内 2 式土器編年の課題－東関東を中心として」奈和 15 周年記念論文集号
- 庄司 克 1981 「堀之内 2 式土器小考」（1）『貝塚博物館紀要第 7 号』千葉市加曽利貝塚博物館
- 山内 清男 1939 『日本先史土器図譜』
- 八幡 一郎 1973 「貝の花貝塚」松戸市文化財調査報告第 4 集、松戸市教育委員会
- 和田 哲 1982 「昭島市龍津寺東遺跡の敷石住居址」多摩考古 5. 多摩考古学会
- 1982 「堀之内式土器 シンポジウム資料」市川考古博物館